

《研究ノート》

マルクス主義理論史研究の課題 (XV)

—白井聡著『未完のレーニン：〈力〉の思想を読む』によせて—

太 田 仁 樹

1. はじめに

本シリーズでレーニン研究をとり上げるのは、1999年の第10回「岡田和彦著『レーニンの市場と計画の理論』によせて」以来2回目である。先稿の冒頭において、日本のレーニン研究の状況について、つぎのように述べた。「『レーニン研究』と称して、自らの政治的プロパガンダをおこなおうとする著作は汗牛充棟であるが、日本の学界はレーニンを対象とする研究を数えるほどしか産出していない」（太田 [1999], 53）。その後8年を経過したが、レーニンを対象とする本格的な学問的研究が日本でほとんどなされていない状況はそれほど変わっていない。しかしながら、レーニン没後80年の2004年前後には、レーニンについて一部で語られる状況が現われた。

上島武・村岡到編の論文集『レーニン：革命ロシアの光と影』（上島・村岡編 [2005]）は、2004年におこなわれたレーニン没後80年を記念するシンポジウムをもとにした著作であるが、レーニンを論ずると称して自らの政治的見解を開陳することに終始する従来型の論考も見られる。今回の「レーニン論」の若干の特徴は、かつてのレーニン礼賛の裏返しとして、レーニンに対する罵倒を重ねているが、歴史的存在としてレーニンを理解しようとする姿勢がなく、レーニンを理解するべく蓄積された研究史を踏まえ、現代の「現代」の否定に躍起になっているところにある。方向は逆向きであるが、かつての状況の繰り返しである。ただし、この論集には森岡真史「レーニンと「収奪者の収奪」」のような本格的な研究の成果も含まれている点で今後の学問的研究の発展につながる可能性もある。

同年に出版された長原豊・白井聡編の論集『別冊情況 特集 レーニン〈再見〉：あるいは反時代的レーニン』（長原・白井編 [2005]）は、外国人の論考を訳出し日本人の論考も加えた論集であるが、崎山政毅「ラテンアメリカとレーニン」などを除けば、歴史的存在としてのレーニンにこだわることなく、「現代」に関する自らの見解を展開したものであり、1970年代にはよく見られたスタイルの著作になっている。この意味で「反時代的」な著作となっているが、学問的研究の成果に背を向けている点では伝統的な論文集といえよう。

ほぼ同じ時期に、韓国の雑誌『マルクス主義研究』第2号は「レーニン主義の現在性」という特集を組み、編集長のチョン・ソンジン自身が「レーニンの経済学批判」（정 [2004]）という論考で、

レーニンの経済理論について批判的な検討をおこなっている。チョン論文は、レーニンの理論の現代的妥当性をの存否を検証しようとするものであるが、歴史的存在としてのレーニンに関する先行する学問的研究を踏まえ、先行研究にたいして自説を対置するという、オーソドックスな手法によりレーニン理解を一步進めようとするものであり、上記の2論集に含まれる研究史を無視した現代性の否定や称揚とは一線を画するものであり、学問的レーニン研究の前進に裨益するものである。

白井氏の著作は、日本でひさびさに現われたレーニンに関する単著である。白井氏は上記の『別冊情況』の編者でもあり、レーニンの現代性を称揚する立場に立つ点で、伝統的レーニン論者の一タイプであるといえる。この著作もレーニン礼賛本の一つと言ってよいが、従来の礼賛本とは異なったものが見受けられ、レーニン受容の現代的特徴を示すものとなっている。

2. 本書の課題

白井氏は「はじめに」の末尾で、「本書がめざすのは、「レーニンが残したいくつかのテキストを精読することによって、「リアルなもの」にかかわる二つの事柄を探究することである。ひとつには、リアルなものをとらえ、それに働きかけるレーニンの身振りである。そしてもうひとつには、現代世界においてふたたび形成されつつある、純粋な資本主義が必然的にもたらす社会構造・国家のリアルな姿である。われわれは、それをレーニンの言説を通して垣間見ることができる」（白井 [2007a], 4）と述べている。

「リアル」というタームに白井氏は特別な含意を込めて課題を設定しているようだが、ここではそれは分明ではない。本書で白井氏がとり上げているレーニンのテキストが『何をなすべきか?』と『国家と革命』であることから推し量ると、「リアルなものをとらえ、それに働きかけるレーニンの身振り」を示しているのが『何をなすべきか?』であり、もうひとつの「純粋な資本主義が必然的にもたらす社会構造・国家のリアルな姿」を示しているのが『国家と革命』という著作であるということであろう。

レーニンの思考全体を『何をなすべきか?』と『国家と革命』というわずか二つの著作を素材にして語るのは無謀なことであるように思われるが、もしレーニンの全著作を読みきった上で、この二つの著作の精読という形で、レーニンの思考の精髓を示すことが出来ているとすれば、そのような試みも認められるべきかもしれない。

第1部「躍動する〈力〉の思想をめぐって」では、この二つの著作の分析によって何を示そうとしているのか、白井氏の目指すものが予示されたうえで、第2部では『何をなすべきか?』が分析され、第3部では『国家と革命』が検討される。

第1部の冒頭、違和感をひき起すようなつぎのような叙述に出くわす。白井氏によると「この2著が現在レーニンを語る際に、もっとも否定的に言及される著作ともっとも好意的に言及される著作であるという傾向」が存在するという。しかも、それは左翼のあいだに存在する傾向であるという（白井 [2007a], 23-24）。「もっとも否定的に言及される著作」とは『何をなすべきか?』であり、「もっとも好意的に言及される著作」とは『国家と革命』のことである。

日本には、かつてローザ・ルクセンブルクを掲げる左翼が存在し、彼らが『何をなすべきか?』を目の敵にしていたという事実はある。だが、左翼に属する者の大多数は『何をなすべきか?』と『国家と革命』そして『帝国主義』を「導きの書」にしていたものである（「ナニナス」、「コッカク」、「テイロン」と呼ばれていた）。『何をなすべきか?』を否定し『国家と革命』を好意的に評価するというのは、リベラルな人びとのなかに時々見られる傾向であった。白井氏が「左翼」と呼んでいるのはそのような人びとなのだろうか。かつては「リベラル」と呼ばれていた人を、「左翼」と呼ぶところに、白井氏の「現代性」が現われている。

ともあれ、なぜこの2著作がとり上げられるべきなのかについての白井氏の説明を聞こう。白井氏の説明によると、『国家と革命』が重要な意味を持つのは、これが「1917年の8月から9月の間、すなわち10月革命のまさに前夜に書かれた」（白井 [2007a], 25）ことにある。そして白井氏は言う。『国家と革命』こそが、「10月革命」を導いた思想であり、『国家と革命』がなければ、「10月革命」はありえなかった、というのである。レーニンが1917年に「レーニン」になったのであり、それ以前のレーニンは「レーニン」ではなかったというこの説明は、ハーディング (Harding [1996], 268) あたりが主張していることであるが、白井氏はこのような論調を受け入れているのである。「この時期のレーニンをとらえるとは、まさに「レーニン」になりつつあるレーニンをとらえることにほかならない。そして、今述べてきたように、この時期に書かれた『国家と革命』をそのもっとも体系的な結実として産んだ彼のこの時の理論が、ボリシェヴィキによる蜂起を理論的に裏づけ、彼の理論を現実に移す決定的な一步を踏み出させ、歴史にレーニンの名を刻ませたのである」（白井 [2007a], 26）と。

『何をなすべきか?』の意味を白井氏は、どのように捉えているのだろうか? 白井氏によれば、レーニンの「このテキストは「知り尽くされた」どころか、その核心が真に読み取られたことなど、いくつかの例外をのぞいて、今日にいたるまでほとんどなかった」。「このテキストでレーニンが説いているのは、革命による新しい世界の創造を果たすためには、いまここにある世界で流通している論理と思想的に完全に手を切らなければならない、ということである。つまり、革命をなすためには現在にある世界の「外部」へと超出しなければならず、だからこそ「外部」からもたらされなければならない」（白井 [2007a], 35-36）ということである。白井氏が「外部」で何を意味しているのか、これが検討の焦点となる。

続いて第2部では『何をなすべきか?』を検討することによって、レーニンの「外部の思想」の理路を明らかにし、第3部ではその帰結を『国家と革命』を読み解くことによって目撃する、と宣せられる。われわれも、この順序に従って、白井氏の議論を見ていこう。

3. 『何をなすべきか?』 読解

第2部「『何をなすべきか?』をめぐって」は、フロイトのユダヤ教論のロジックを援用して、レーニンのこのテキストを読み取ろうとする試みである。まず白井氏は社会主義理論の労働者階級に対する絶対的な外部性を強調するレーニンに注目する。

「レーニンが持ち込んだ決定的な論点とは、社会主義理論のプロレタリア階級に対する外部性であり、それはプロレタリア革命の理論と実践はプロレタリア階級からは必ずしも生じないという逆説をもたらさずにはおかない。」(白井 [2007a], 70)

社会主義理論は労働者階級の日常意識の外部からしか生まれえないということは、このテキストを読む人にとっては自明のことであるが、白井氏の独自性は、このレーニンの論理がフロイトのユダヤ教論との論理と相似であることを、論証抜きで指摘する点にある。

「レーニンが語った、本物の社会主義イデオロギーの出自は労働者階級に対して人格的・階級的という意味ではなしに、外部のものでなければならないという主張と、フロイトが語ったモーセのイデオロギーのユダヤ人共同体に対する非民族的な意味での外部性という事柄が、じつに似通ったものであることを確認しておくべきだろう。」(白井 [2007a], 78)

白井氏は、レーニンのイデオロギーをフロイトのいう「一神教」に、ベルンシュタインのイデオロギーを「多神教」になぞらえることで、修正主義論争についてのユニークな解釈を導きだす。この場合、「多神教」は「一神教」にくらべて低い段階にあるとされていることは、当然のこととされる。ベルンシュタインの理論は、「一神教から多神教への退行にほかならない。ベルンシュタインのこのような一種の「合理主義」は、古代的なアニミズム的・多神教的心性においても存在するからだ」(白井 [2007a], 80)。これに対しレーニンの理論は「一神教」的なものであり、それは労働者階級に対する外部性に現われている。このように、レーニンの理論の優越性とベルンシュタインの理論の劣等性は、フロイトのロジックを借りることで、その教義内容の分析を通さずに、理解できるとされている。

白井氏は、資本主義の社会への浸透を、フロイト的なタームを用いて「神経症の普遍化」と呼ぶ。そして「レーニンにおいて神経症からの回復の手立ては、ロシアの社会主義思想・マルクス主義思想を一神教的なものへと練り上げること(それはレーニン自身がしばしば強調したように、マルクスの本来の発想への復帰でもある)において、見出された」(白井 [2007a], 116)とする。このあたりは白井氏流の単なる言葉遊びである。「資本主義の社会への浸透」が、何故「神経症の普遍化」なのか、何の説明もないからである。ともかく、「一神教のメッセージは、強迫的に「快感原則の彼岸」において、覚醒させられてしまうものである」が、その事態を明らかにするのが『国家と革命』というテキストであるとされている。

われわれは、『国家と革命』に進むまえに、第2部で白井氏が語っていることは何なのか、もう一度検討してみよう。

第1部で、白井氏は、レーニンが『何をなすべきか?』で引用している、カウツキーのつぎの文章を提示している。

「今日の社会主義意識は、深遠な科学的意識を基礎としてはじめて生まれうる。実際、今日の経済科学は、例えば今日の技術などと同じように、社会主義的生産の一前提条件を成すものであるが、しかしプロレタリアートは、どんなにそれを望んだところで、そのどちらをも自分で作り出すことはできない。それらは両方とも、今日の社会過程のうちから生まれてくる。ところで、科学の担い手は、プロレタリアートではなく、ブルジョア・インテリゲンツィアである。現代の

社会主義もやはりこの層の個々の成員の頭脳に生まれ、彼らによってまずはじめに知能の発達のすぐれたプロレタリアたちに伝えられ、ついでこれらのプロレタリアが事情の許すところで、プロレタリアートの階級闘争のなかにそれを持ち込む。だから、社会主義意識は、プロレタリアートの階級闘争のなかへ、外部から持ち込まれた或るものであって、このなかから自然発生的に生まれてきたものではない。」(白井 [2007a], 45.カウツキーの原文は、*Neue Zeit*, 1901-1902, XX, 1, No. 3)

レーニンはこのカウツキーの文章を引用して、いわゆる「外部注入論」を展開するのだから、「外部」についてのレーニンの理解とカウツキーの理解の相違はどこにあるのかは、白井氏の議論にとって重要な意味をもつはずである。しかし、白井氏は自分なりの分析を提示することなく、ヴァリツキからの引用で済ませている。ヴァリツキの説明は、レーニンとカウツキーの差異は「政治権力の掌握をめざす職業的革命家と、必然性の完全に客観的な理解を得ようとする学者との間の差異」であるというものである (Walicki [1995], 213)。ヴァリツキはマルクス主義の歴史に通暁した碩学であるが、問題の本質に切り込めていない。

この問題については、わが国の研究史はつぎのような解釈を与えている。

「カウツキーの議論は、社会主義意識の歴史的起源論であるが、レーニンの議論は、それに加えて、現時点での社会主義意識の「外部からの持ち込み」を強調するものになっていることに注意。この問題はマルクス主義が「プロレタリアートの理論」と自称し、なおかつ現実の労働者大衆の意識とは離れた課題を「プロレタリアートの歴史的」任務と称することの理論的困難性に触れるものであるだけに重要である。」(太田 [1997], 343)

この解釈は、レーニンとカウツキーの差異を、「革命家と学者との差異」というありきたりの理解を超えて、マルクス主義の社会的性格自体を問題にすべきであるという指摘であり、マルクス主義者が自己のイデオロギーを「プロレタリアートの理論」であるとしてきた自己規定そのものの問題性に迫るものであり、通俗的理解のレベルにとどまろうとする者が踏み込めない領域にメスを入れたものであった。そしてこの指摘は、つぎのようなマルクス主義理解、修正主義理解へと発展させられている。

「レーニンの議論は、現実の労働者という存在からはマルクス的な社会主義という目標は出てこないといことを強調している点で、カウツキーを批判する内容になっている。レーニンの主張は、「自由人の共同体」という理想を、現実の労働者＝「革命的プロレタリアート」という幻想によって、実在する世界とつなごうとしたマルクス自身に対する批判を含意するものであり、ベルンシュタインの現実認識に重なるものであった。／……確立した資本主義社会の労働者は、マルクスが夢想したような革命性とは無縁であるということ、レーニンはベルンシュタインとともに見抜いていた。」(太田 [2005a], 98-99)

「レーニンは、「革命的なプロレタリアート」を現実の労働者と切り離すとともに、「革命的プロレタリアート」を革命的な知識人の党によって作り出そうとしたと言えよう。革命党こそが「革命的プロレタリアート」なのであり、現実の労働者は革命党によって指導される場合のみ、「革命的なプロレタリアート」となりうるのである。現実の労働者は革命党による革命意識

の注入がなければ、小ブルジョア的なものとどまるのであり、革命党による革命意識の浸透によって労働者階級が革命的なものになるのであれば、革命党は資本主義の発達とその結果としての現実の労働者階級の成熟を待つ必要はない。労働者階級の「成熟」とは社会主義意識の吸収によってのみ達成されるものであり、重要なのは、現実の労働者が支配階級の内部に取り込まれていないことなのである。」(太田 [2005a], 99)

以上のような内容を、いわゆる「外部注入論」は示しているのである。ポイントはマルクスのイデオロギーは現実の労働者の存在とはかけ離れている、この意味でマルクス主義は、労働者階級の「外部」に存在する思想であるということ、レーニンが見抜いていることであり、カウツキーはこのような認識を欠いているということである。カウツキーにおいては、歴史的発展によってマルクス主義イデオロギーと現実の労働者が一致する時点が想定されるが、レーニンにおいては、いつまで待っても「外部注入」のない労働者はせいぜい「組合主義的政治」のイデオロギーにとどまるのである。

「自由人の共同体」を夢想する、亡命インテリのマルクスのイデオロギーは、資本主義社会の中核的労働者にとって無縁なものでしかないという歴史的事実こそが、マルクス主義の労働者階級に対する「外部性」論議の社会的背景であり、カウツキーやレーニンの論争の社会的淵源である。

第2インターナショナルのマルクス派、とくにドイツのマルクス派の多くは、マルクスのイデオロギーと現実の労働者とのこの懸隔についてよく知っていた。修正主義論争は、社会主義運動が現実の労働運動との接点を拡大し、社会主義者がブルジョア社会のリアルな現実に向き合わねばならなくなったということを背景としている。すなわち、リアルな現実のなかで、政治勢力として自己を維持・拡大することが課題となったので、亡命者内部で展開されていたような「労働者＝革命主体」などという空論的革命論議は通用しなくなったということを示している。ドイツの論者たちはこの問題に対してさまざまな態度をとった。カウツキーは空論と現実の労働者を科学知識の浸透のアナロジーで架橋しようとしたが、バルンシュタインは空論の廃棄を主張した。アウアーは空論を各個人の信仰の問題に封じ込め、空論の現実政治への侵入を遮断しようとし、パルプスはそれを批判した。ローザ・ルクセンブルクは空論と現実との懸隔を認識できなかった。

以上のようなドイツにおける論者たちの対抗関係を踏まえつつ、レーニンは革命党による「革命的プロレタリアート」の創出により、マルクス主義は空論ではなく現実となりうると考えた。現実の労働者はマルクスの理想と無縁であるが、操作次第では「革命的プロレタリアート」となりうる。レーニンにおいては、労働者階級の「特権性」は、革命党に移譲された分だけ薄められる、革命党による注入がそれを補う。『何をなすべきか?』というテキストは、革命思想としてのマルクス主義の根本的問題性を指し示すとともに、第2インターナショナル期のマルクス主義諸派の配置の理解の鍵を提供するのである。

『何をなすべきか?』における「外部」の問題は、マルクスのイデオロギーそのものが、労働者階級の「外部」にあるという問題に突き進まなければ理解できない。マルクスのイデオロギーを抱懐したマルクス主義者が、リアルな現実と接触したときに、どのように反応せざるを得なかったのかを検討しなければならない。白井氏は現実の労働者が革命的な存在でないことを認識している。しかし、革命的たりえない労働者を革命の主体に措定したマルクスの理論が欠陥革命理論にとどまらざるをえ

ないことを問題にしようとしなさい。

『何をなすべきか?』は、マルクスの理論が現実の労働者についての把握において難点を有し、その意味でマルクス理論が欠陥革命理論であることを内容的に指し示している、しかも、レーニン独自の革命党理論の提示によってマルクス革命論を補正し、マルクス主義を現実に機能しうるものにしていく点でマルクス主義理論史上希有なテキストとなっている。レーニン以外のマルクス主義諸派は、政権獲得に成功することができなかったことを考慮しても、このテキストの意義ははかり知れないものがある。白井氏は『何をなすべきか?』この意義を見抜くことができなかった。白井氏はフロイト説の解説に逃げ込むことによって、マルクスの革命論の欠陥の摘出を回避したため、マルクスとレーニンの緊張感に満ちた継承関係を把握できなかった。白井氏の問題探究の筋道を阻んだのは、彼のマルクスに対する護教意識だったのだろうか?

4. 『国家と革命』読解

第3部『『国家と革命』をめぐって』は、白井氏のいう〈力〉の生成と展開(〈力〉の経路)を解明することを課題としている。このテキストの内容もよく知られているので、通常理解と異なる白井氏の独自の解釈に力点を置きながら、その論理をたどってみよう。

『国家と革命』の論理は、エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』に依拠していることはよく知られている。だが白井氏によると、レーニンの国家概念は、エンゲルスのそれとは相違しているとのことである。白井氏はつぎのように述べる。

「エンゲルスはここで前近代国家と近代国家との差異を無視している、つまり奴隸的ないし封建的身分制社会を基盤とする前近代社会における国家と、形式的には人格の平等が承認されている近代資本主義社会とを、等しく階級社会における国家として明らかに混同して記述している、レーニンの国家概念は、すぐれて近代的な国家、厳密を期して言えば、近代資本主義のもたらす社会構造にもとづく国家に限定されたものであることに注意しなければならない。」(白井 [2007a], 130)

エンゲルスの国家概念は前近代国家と近代国家の差異を無視したものであるが、レーニンのそれは近代国家に即したものである、と白井氏は言う。その論証は如何になされているだろうか? 注目すべきところである。だが白井氏の論証はない。

代わって、宇野派の経済学者の馬場宏二が登場して説明してくれる。白井氏は馬場 [1976] を引用してから、「自由を物理的に抑圧する暴力を資本家自身が行使することは、ア・プリオリに禁じられているということだ」(白井 [2007a], 132) と、牧歌的な労資関係を語っている。エンゲルスは労資関係が本質的には奴隸制と同質であると把握しているがゆえに、「混乱」していると非難されている。確かに、馬場(=白井)のような労資関係認識は、エンゲルスの認識とは異なっているが、レーニンの認識とも異質である。エンゲルスとレーニンの認識は同質である。

白井氏の宇野派へののめり込みは昂進する。つぎに登場するのは岩田弘である。白井氏は、岩田 [1983] から引用した上で、近代資本制社会においては、資本家階級による労働者階級の搾取には限

界が原理的に存在しえないので、レーニンが語る階級対立の和解不可能性は、資本制社会に特有なものと考えられなければならない（白井 [2007a], 132）、と述べている。これもエンゲルスの「階級対立の非和解性の産物」としての国家という規定を念頭においた発言であろう。では階級対立の非和解性というのは、前資本主義社会にはなかったのだろうか、レーニンはそう考えていたのだろうか？実は、階級他律の非和解性についても、レーニンはエンゲルスを継承している。白井氏のいう「搾取の無限界性」と「階級対立の和解不可能性」とは別の次元の問題なのである。

第3部の白井氏の議論の特徴の一つは、レーニンの議論に即して論証すべき論点が、宇野派からの引用で代替されていることである。岩田弘への依存は、さらに白井氏のレーニン理解の中核部分にまで進んでいく。岩田 [1971] を引用した上で、「見かけ上誰が国家を担っているとしても、それはブルジョア国家の根本性質に対して本質的な影響を及ぼさないということだ」（白井 [2007a], 147）と、白井氏はブルジョア国家の特徴づけをおこなう。そして、このブルジョア国家の特徴から、抑圧階級である資本家階級にとっての致命的な弱点が生まれるとされる。資本家階級は自らの力で自らをあらしめることができないという弱点をもつからである。そして、この「ブルジョア階級のアキレス腱」があることを見抜いたのがレーニンである、と説明される（白井 [2007a], 148-149）。白井氏のいう〈力〉は、この構図の中から生成する。

白井氏によると、この問題を突き詰めて考えたのはエルネスト・ラクラウとシャンタル・ムフである。Laclau and Mouffe [2001] を引用して、「資本制社会においては、労働者階級は必然的に分断されている」という命題を導き出している。なぜなら、「労働者階級はそもそも団結することのできない階級であるがゆえに必当然に分断化する」（白井 [2007a], 166）。ラクラウとムフのこの見解を説明してくれるのは、再々度登板する岩田弘であり、白井氏本人ではない。白井氏は、岩田 [1983] からつぎの一節を引用する（白井 [2007a], 168）。

「労働者階級自身もまた、労働力商品の私的販売者としてのたがいに競争関係にたち、その販売する労働力商品の種々雑多な性質や格付けに応じて、熟練工、不熟練工、機械工、運搬工、紡績工等々の雑多な特殊利益集団の寄せあつめからなりたつものとして現われざるをえないのである。」（岩田 [1983], 185）

白井氏が労働者階級の団結の困難性を強調するのは、つぎの段階での労働者の団結の意義を強調する前段としての意味を持っている。つぎの段階とは、国家との闘争の段階である。このことを、白井氏は久しぶりにレーニンからの引用で論証しようとしている。引用されるのは『国家と革命』第3章の末尾のつぎの一節である。

「現実に人民の大多数を運動に引き入れる「人民」革命は、プロレタリアートと農民をどちらも含める時にだけ、「人民」革命となることができた。両階級が当時の「人民」をまさに構成していた。両階級が統一されていたのは、「官僚的・軍事的国家機構」が彼らを抑圧・圧迫・搾取することによってである。」（白井 [2007a], 171-172）

白井氏は、レーニンが労働者階級の団結の困難性の問題を指摘していると思って、この引用をしているのであろう。だが、この箇所ではレーニンが論じているのは、プロレタリアートと農民という異なった階級の「統一」が何故可能なのか、その根拠を述べているのであり、労働者階級自身の「統一

（団結）」の困難という問題とは別の問題である。白井氏はレーニンの言う「統一」の問題と自分の言う労働者階級の「統一（団結）」の問題とを混同して論じている。論理的錯乱というほかないが、この「錯乱」は白井氏にとって必要不可欠である。白井氏は「錯乱」によってしか、自分の主張とレーニンの主張を繋ぐことができないからである。

白井氏は言う。「C2（被抑圧階級のこと—太田）の統一がつくりだされるのは、非抑圧者たちの自然な性向によってではなく、またC2のブルジョアジーとの闘争とによってでもなく、国家との闘争においてであるということにはほかならない。」（白井 [2007a], 171–172）労働者階級の「統一」が、資本主義社会における労働者階級の経済的・社会的地位を根拠とするものではなく、労資間の闘争を通じて形成されるものでもなく、もっぱら「国家との闘争」において生成するという見解は、白井氏に独自のものであるが、マルクスの見解とも、エンゲルスの見解とも、レーニンの見解とも異質なものである。当然、白井氏は自分の見解がレーニンの見解と同質なものであることを論証できない。そこで『国家と革命』の一節の「錯乱」的解釈が必要となったのである。

さて、白井氏の筋書きでは、「特殊な力」としてのブルジョア国家に代わって「普遍的な力」が出現することになっている。この筋書きは『国家と革命』からの引用（第3章第2節）によって「論証」されているかに見える（白井 [2007a], 177–178）。しかし、レーニンのテキストには「普遍的な力」なるタームはないので、レーニンが「国家権力の諸機能の遂行それ自体が全人民のもの」になると言っている事態を、白井氏が「普遍的な力の出現」と表現していると思われる。白井氏はつぎのように述べている。

「近代資本制社会における公権力の実体は、必然的に支配者階級そのものではない。……具体的な統治行為を担う者は、「公」の状態にある者でなければならず、その実体をなすのは社会の大多数を占める「労働者階級やその他の勤労人民大衆」であるほかない。／……つまり、国家権力の実体——すなわち、「労働者階級やその他の勤労人民大衆」——が公権力という在り方をしているときには、まさにそれは「特殊な存在様式」にあるということにはほかならないのである。してみれば、「普遍的な力」が生成するということは、「特殊な」な存在様態にある〈力〉が、本来の状態に移行することでしかない。」（白井 [2007a], 181–182）

白井氏のいう〈力〉は近代資本主義社会において国家権力として既に登場している。ただし、それは「特殊な存在様式」で現われている。「特殊」ということの意味は、労働者やその他の勤労大衆を実体とする国家権力がブルジョア国家として現われるということにある。エンゲルスは、支配階級の暴力装置を「特殊な力」として規定したが、白井氏は、近代資本主義社会において国家権力の実体をなしている「労働者階級やその他の勤労人民大衆」が「公権力」として存在しているその「特殊な存在様式」を、「特殊な力」と呼ぶのである。この「特殊な存在様式」にある〈力〉が本来の状態に移行することが、「普遍的な力」の生成ということだと規定される（これが白井氏のいう「革命」である）。説得力を持つか否かを別にして、この議論がユニークであることは確かである。

エンゲルス（そしてレーニン）によれば、革命（「国家の廃絶」）とは、ブルジョアジーがプロレタリアートを「抑圧するための特殊な力」が、プロレタリアートがブルジョアジーを「抑圧するための特殊な力」（プロレタリアートの独裁）と交代することである（『国家と革命』第1章第4節）。白井

氏においては、二つの〈力〉がぶつかり合うという場面は考えられていない。〈力〉はすでにブルジョア国家の公権力のなかにあるからである。この公権力の様式変化（「特殊な力」から「普遍的な力」へ）が革命だと考える白井氏は、マルクスやレーニンが重視したコンミュンやソヴェトに結集した大衆の武装に注目しない。彼が重視するのは既存の軍隊の獲得（「寝返り」工作）である。白井氏においては革命とはとどのつまり軍隊をどちらが握るのかという問題に帰結するようである。革命における武装という点でも、白井氏の理解は、マルクスやエンゲルスやレーニンとは異質である。

だが、白井氏は、「資本家を倒し、武装した労働者の鉄腕でこれらの搾取者の反抗を粉碎し、近代国家の官僚制を破壊する——そうすれば、われわれの前には「寄生体」が取り除かれ、高度な技術を装備した機構が現われる」（『国家と革命』第3章第3節）というレーニンの言葉を引用し、そのことが〈力〉という実体の様式変化を意味すると述べている。ここでレーニンの述べていることは、ブルジョア的な〈力〉が粉碎され、異質なプロレタリア（人民）的な〈力〉（「武装した労働者」）が出現するということであり、同一の実体としての〈力〉の様式変化（既存の軍隊の「寝返り」）が生ずるということではない。レーニンによれば、新たな〈力〉の源泉は、ブルジョア的公権力の内部に隠れているのではない。ソヴェトに結集したプロレタリアート（全人民）の存在であり、その武装である。

白井氏の『国家と革命』読解のなかで意味のある部分はほぼ以上に尽きている。白井氏は、考察をつぎのように締めくくっている。

「レーニンとは誰か、いかなる思想の持ち主であったのか、ということを見極めることを本書は課題として設定し、書き進められた。われわれは彼を「リアルなもの」の探究者としてとらええるという前提のもとづいて論を進めてきたが、この前提の正当性はおそらく証明されたのではないだろうか。」（白井 [2007a], 217）

われわれが見てきたのは、白井氏の議論がテキストの文言という「リアルな」基礎を欠いた、一個のフィクションであったということであった。そして、白井氏の主張する〈力〉とは、マルクスやエンゲルスやレーニンの考える〈力〉とはまったく異質なものであり、白井氏が宇野派の文献をもとに再構成したものであった。

『国家と革命』の読解において注意しておきたいのは、エンゲルスとレーニンの間に楔を打ち込む白井氏の筆法である。評者は、日本におけるマルクス主義論議について、かつてつぎのような指摘をしたことがある。

「1956年のスターリン批判以後の日本でのマルクス主義研究の多くは、マルクス—①→エンゲルス—②→レーニン—③→スターリンという、ソヴェト・マルクス主義によってつくられた定式を打ち砕くことを目標にしていた。③に楔を打ち込んでスターリンを批判する者は、マルクスからレーニンにいたるマルクス主義を救済しようとした。この試みを補強するものとしてトロツキーの復権が叫ばれることもあった。②に楔を打ち込んでロシア・マルクス主義を批判する者は、マルクスとエンゲルスだけは延命させようとした。ここでは、ローザ・ルクセンブルクやグラムシが利用されることもあった。①に楔を打ち込んで、エンゲルス以後のマルクス主義全体を俗流と批判する者は、救済に値するものはマルクスだけであると主張した。この場合、しばしばエンゲ

ルスはカウツキーと結びつけられた。さらには、マルクスの生涯を初期、中期、後期と分けて、気に入った時期のマルクスだけを継承すべきだと主張する者もいた。これらの論者は、自分の共感するマルクス主義者あるいはマルクスの一側面だけを取り上げ、賞賛するものであり、マルクスを救済するとみせて、結局は自己の思想を「真のマルクス主義」あるいは「真のマルクス思想」として称揚するという、自己賞賛=ナルシシズムに耽っていたのであった。このような「研究」は、歴史的な存在としてのマルクスとマルクス主義を理解することを妨げるものでしかなかった。(太田 [2005a], 89)

宇野派の一部に見られる傾向は、①あるいは②の間に楔を打ち込み、マルクスとエンゲルス、エンゲルスとレーニンとを切り離し、マルクスとレーニンとを結びつけ、エンゲルスを放逐しようとする試みであったと言える。このような試みは、マルクス主義の全体像の探究を妨げる試みであり、ナルシシズムの一種であった。白井氏の『『国家と革命』論』はこのナルシシズムに引き寄せられたものといえよう。

最後に一言すれば、白井氏によれば、『国家と革命』読解の目的は、「現代世界においてふたたび形成されつつある、純粋な資本主義が必然的にもたらす社会構造・国家のリアルな姿」を解明することにある(白井 [2007a], 4)。それが「マイケル・ハート=アントニオ・ネグリが「帝国」と名づけたような新しい形への再編成」(白井 [2007a], 158)を意味しているとするなら、これにも白井氏は成功していない。レーニン解釈の問題とは別個の問題として、ハートとネグリが「帝国」と名づけたような「再編成」は現実の世界には存在せず、彼らの妄想の中にしか存在しないからである。

5. むすび：「レーニン登場」の時期など

白井氏のとり上げたレーニンのテキストは、『何をなすべきか?』と『国家と革命』であり、『国家と革命』が本論、『何をなすべきか?』が序論という位置づけが与えられているように思われる。レーニンを理解するにはレーニンの全著作を精密に読むこと以外にないことは、はじめに述べたところである。レーニンを論ずるにあたって、全著作について理解を示すことが望ましいが、紙幅の都合もあって代表的な著作しかとりあげられないことは已む得ないことである。だが、マルクス主義理論史上での重要性から言えば、『国家と革命』が本論、『何をなすべきか?』が序論という位置づけは、如何にも不適當である。

この不適當さは、白井氏のレーニン理解の不十分さの表現といってもよい。両著作ともよく知られた著作であり、左翼運動に関わった人、左翼運動に関心を持つ人なら、誰でも何度も読んだことのある著作であるが、『何をなすべきか?』の「外部」が意味するところを十分に理解するには、マルクス、エンゲルス、ドイツ・マルクス主義の諸派、ロシア・マルクス主義の諸派について正確な知識が不可欠である。このテキストで展開されている論点はマルクス主義の根幹にかかわる問題であるから、ロシア・マルクス主義内部での論争等、今後も一層の探究が必要であるが、その際、フロイトの理論はこのテキストの理解にとって、何の援助にもならない。

『国家と革命』は、書かれた時期を考慮しつつ読めば、それほど難しいテキストではない、マルク

スとエンゲルスの所説のなかから、レーニンから見て重要だと思われる章句をとり上げ、レーニンなりのロジックで再構成したものである。決して白井氏がいうような「体系的な結実」（白井 [2007a], 26）ではない。その際、マルクスとエンゲルスは一体と見なされ、レーニン自身もこれらの教祖たちと一体化していることが特徴である。ここで展開されている国家像は、奴隷制や農奴制と区別される資本主義国家論と理解してはならない。前資本主義国家と共通する階級国家一般の廃絶と過渡期の国家の死滅が問題にされている。引用されているマルクスやエンゲルスの章句もマルクス主義者ならば既知であることが前提されている。このテキストの全編を覆っているのは、革命と革命後の状態についてのオプティミスティックな展望である。1917年の権力奪取以前に書かれたテキストに楽観性が横溢していることこそが、このテキストの重要さである。「体系的」な書として読むのではなく、時論として読まなければ、この作品の意味は解らない。

白井氏がこのテキストを〈力〉の原論として取り扱ったのは失敗であった。ここで失敗したことが、つぎの失敗（「馬場・岩田的国家理解＝レーニン国家論」という誤解）につながった。白井氏は、『国家と革命』の「理論がボリシェヴィキによる蜂起を理論的に裏づけ、彼の理論を現実に移す決定的な一歩を踏み出させ、歴史にレーニンの名を刻ませたのである」と言って、「レーニンをわれわれの知っている「レーニン」たらしめたのは、実にこの時期のレーニン」であったと主張している（白井 [2007a], 26）。「4月テーゼ」の理論的背景に『国家と革命』を置く、このようなレーニン理解は妥当性を欠く。

わが国の研究史は、1905年の第1次ロシア革命のただ中の論説『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』について、つぎのような指摘をおこなっている。

「ブルジョア革命は、「意識性」をもったプロレタリアートの集団であるボリシェヴィキによる権力獲得への通過点にすぎない。ブルジョア革命によって成立する社会は、それ自身には価値のあるものと考えられているのではないので、専制が打倒されるやいなや、直ちにボリシェヴィキの権力獲得に向けて、活動がなされなければならない。1917年の2月革命の後に、レーニンが直ちに臨時政府の打倒を提起することができたのは、この論理を身につけていたからである。このような論理は、実際上の行動では、パルヴスやトロツキーの永続革命論と同様な方針になるのであるが、レーニンの場合、同盟軍を農民に求め、その方針の社会経済的な根拠づけをおこなおうとしたところが独自のものである。」（太田 [1997], 335）

この見解はつぎのように発展させられている。

「専制打倒の第1段階とボリシェヴィキの権力獲得という第2段階の区別は、……ボリシェヴィキによる権力獲得の前段階とそれ以後という以上の意味をもたない。その意味で『二つの戦術』における革命構想は、1917年のレーニンの政治方針を先取りしたものであった。2月革命の勃発後、レーニンがただちに臨時革命政府の打倒と、ボリシェヴィキによる政権奪取という方針を提起したのは、専制の打倒と政権の奪取とを一つのプロセスと考える『二つの戦術』における戦略が確立していたからであり、『哲学ノート』や『帝国主義論』を待つ必要はなかったのである。」（太田 [2005b], 259）

「4月テーゼ」のレーニンは、1905年革命のなかから登場したのであって、大戦の勃発を、まして

1917年を待つ必要はなかったのである。白井氏は別の論考で、『二つの戦術』でレーニンが提起したのは、「ブルジョアジーに代わってプロレタリアと農民が専制に対抗して政治的自由を獲得するための闘争を行わなければならない、ということである」（白井 [2007b], 63）と述べているが、レーニンがここで主張しているのは、プロレタリアート（ボリシェヴィキ）に指導された労働者と農民の「独裁」であり、政権奪取である。白井氏は先の引用の後で、レーニンは「民主主義的変革と社会主義的変革の混同」（同）をたしなめていることを指摘して、政権獲得説を批判しているが、これは次元の違うことを持ち出しているだけであり、政権獲得説の批判になっていない。「民主主義的変革と社会主義的変革の混同」の問題については、後にレーニン自身が『プロレタリア革命と背教者カウツキー』（1918年）で詳論している含意を踏まえるべきであろう。

レーニンの思想の全体像をつかむには、レーニンの戦略論の変遷を検討することが不可欠である。各時点の戦略論の含意を正確に理解しなければ、レーニンについて何も理解したことにはならない。正確な理解の上に立たない礼賛や罵倒は、発言者の無知をさらすだけである。戦略論の検討の欠如は白井氏のレーニンの致命的弱点である。

「レーニン登場1917年」説は、白井氏だけの固有の説ではなく、近年あちこちで散見される。このような説の近年の源泉は、ハーディング (Harding, N. [1996]) あたりにあり、ジジェク (Žižek, S. [2002]) のような売文家はともかく、チョン・ソンジン (정 [2004]) のような研究者もそれに影響されているようで、その害毒は無視できないものである。白井氏もこの害毒に当たったものと思われる。

しかしこの種の説は、古くからトロツキー派によって唱えられている。その含意は以下のようなものである。

1905年革命の総括のなかで、トロツキーはいち早く当面の革命におけるプロレタリアートの権力奪取を提起したが、レーニンは「4月テーゼ」まで「2段階革命論」とどまっていた。レーニンは1917年になってようやくトロツキーの境地に到達したのであり、トロツキーのボリシェヴィキ入党はそれを踏まえたものである。それ以前のレーニンによるトロツキー批判はレーニンが「レーニン」になる以前のものであり、トロツキーの立場と「レーニン」の立場には対立はなかった。対立はトロツキーと「レーニン」以前のレーニンとの間にある。概ね以上のような内容である。

トロツキーとレーニンの一致と差異の問題を全面的にここでとり上げることはできないが、1917年より前（『帝国主義』以前、『哲学ノート』以前など、種々のヴァリエーションがある）のレーニンが「レーニン」でなかったという主張は失当である。その傍証として、1917年のレーニンの「狂気」を殊更に言い立てる説もあるが、根拠のないものである。クループスカヤがレーニンの「発狂」を証言していることを持ち出すのは（白井 [2007a], 34）、その論者がクループスカヤ並みであることを示しているに過ぎない。1917年のレーニンは、冷静にして沈着そのものであった。

白井氏の著作は、『何をなすべきか？』の「外部」に着目することで、マルクス主義理論史の鍵に迫るかに思えた。しかし、マルクス主義の教義の中身の分析にはいることなく、フロイトの援用に逃げたため、問題を捉えることができなかった。

『国家と革命』を分析の対象に選んだ前提には、「レーニン登場1917年」説という、誤った思い込

み（流行に流された思考）があったが、テキストに内在すれば、誤った前提の見直しもありえた。しかし、馬場宏二と岩田弘という宇野派の経済学者に引きずられる形で、疑似問題（レーニンには存在しない問題）をつくりあげ、そこから資本主義国家についての自説をつくり出した。白井国家論は、マルクスやレーニンとは異質なものである。

本稿は、マルクスやレーニンの議論と白井氏の議論が相違していることのゆえに、白井氏を批判しようとする意図を微塵も持たない。マルクスやレーニンと異質であることはまったく悪いことではない。だが、マルクスやレーニンとは異質な自分の考えをマルクスやレーニンの考えと同じものだと主張するのは、自分を貶めること以外のなにものでもない。研究対象と自己を同一化しないことが思想史研究の要諦である。

《参 考 文 献》

- 岩田弘 [1971], 『現代国家と革命』現代評論社。
 岩田弘 [1983], 『資本主義と階級闘争：共産主義 I』批評社。
 太田仁樹 [1997], レーニンにおける旧ロシアの農村と変革主体, 鈴木信雄ほか編『過渡期の世界：近代社会成立の諸相』日本経済評論社。
 太田仁樹 [1999], マルクス主義理論史研究の課題 (X) : 岡田和彦著『レーニンの市場と計画の理論』によせて, 『岡山大学経済学会雑誌』第31巻第2号。
 太田仁樹 [2005a], マルクス主義理論史研究の課題 (XIV) : マルクス, 修正主義論争, ポリシェヴィズム, 『岡山大学経済学会雑誌』第37巻第1号。
 太田仁樹 [2005b], В・И・レーニン：資本主義の発展と政治・文化, 大田一廣編『経済思想⑥ 社会主義と経済学』日本経済評論社。
 上島武・村岡到編 [2005], 『レーニン：革命ロシアの光と影』社会評論社。
 白井聡 [2007a], 『未完のレーニン：〈力〉の思想を読む』講談社。
 白井聡 [2007b], 転倒の継承：レーニンによるロシア・マルクス主義の創造, 的場昭弘編『マルクスから見たロシア, ロシアから見たマルクス』五月書房。
 長原豊・白井聡編 [2005], 『別冊情況 特集 レーニン〈再見〉：あるいは反時代的レーニン』第3期第6巻8号。
 馬場宏二 [1976], 走り書き『国家と革命』, 『現代思想』2月号。
 Harding, N. [1996], *Leninism*, Duke University Press.
 Hardt, M. and Negri, A. [2000], *Empire*, Harvard University Press.
 Laclau, E. and Mouffe, Ch. [2001], *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics*, Second Edition, Verso, London and New York.
 Walicki, A. [1995], *Marxism and the Leap to the Kingdom of Freedom: The Rise and Fall of the Communist Utopia*, Stanford University Press.
 Žižek, S. [2002], *Revolution at the Gate: Selected Writings of Lenin from 1917*, Verso, London and New York.
 정성진 (チョン・ソンジン) [2004], 레닌의 경제학 비판 (レーニンの経済学批判), 『마르크스주의연구 (マルクス主義研究)』2 (太田仁樹訳, 『岡山大学経済学会雑誌』第39巻第2号, 2007年)。